

日本カメラ博物館 JCII ライブラリー
学芸員 宮崎真二

おかいてるお
岡井耀毅（1933-2017）は、早稲田大学第一政治経済学部経済学科卒業後、1958年に朝日新聞社に入ります。社会部、南米移動特派員、ソウル支局長、『週刊朝日』副編集長などを経て、1977年2月号から『アサヒカメラ』編集長に就任しました。在任中には同誌の創刊50年と戦後復刊30年に関連した『アサヒカメラ半世紀の歩み』『われら写真世代35年』の両別冊を手がけ、1981年4月号まで携わりました。翌年に著した『写真へのメッセージ』（山と溪谷社）には、編集長時代に抱いた疑問や信念についての考察と1981年1月号から掲載された編集後記「編集長のメッセージ」を収録しています。また本書では名前を「輝雄」から「耀毅」に改めており、以降この表記で活動しています。



『なぜ撮るか』

1982年からは、写真家の作品と人物像をまとめた『昭和写真・全仕事』の企画編集を行いました。1984年からは、全日本写真連盟の機関誌『フォトアサヒ』で写真家17名の人評を連載しました。本連載は大幅な加筆修正のうえ『なぜ撮るか 現代写真家の宿命的モチーフ』（山と溪谷社・1986年）としてまとめ、人物像を通した写真家の仕事評価という著述スタイルを確立しました。

1989年末に朝日新聞社を退社し、ジャーナリストとして写真評論執筆、写真書編集などに携わります。同年には『日本フォトコンテスト』の連載をまとめた『映像に見る昭和 社会写評』（くもん出版）を著しました。その後も同誌では月例審査を担当したほか、連載が『日本列島写真家評伝 風土と写真の光景』（日本写真企画・1992年）、『評伝 林忠彦 時代の風景』（朝日新聞社・2000年）、『土門拳の格闘 リアリズム写真から古寺巡礼への道』（成甲書房・2005年）として書籍化されています。

1994年には『瞬間伝説 すげえ写真家がやって来た。』（KKベストセラーズ）を著しました。本書は1991年からミノルタの愛用者クラブ会報『フォトウェーブ』に連載したものを基に、14名の写真家について論じています。同誌の連載は『写真連想小説 ラクチョウの記憶』（海拓社・2001年）が書籍化されています。

『日本カメラ』では、1998年1月号から翌年12月号まで展評を担当したのち、2002年1月号から2004年12月号まで「岡井耀毅が歩く現代写真世界」、2007年1月号から1年間「肉声の昭和写真家」を連載しています。後者は2008年に平凡社から同名で書籍化されました。

これら人物評伝を中心とした著述活動の集大成にあたるものとして、各誌に寄稿したものをまとめた『昭和写真劇場』（成甲書房・2008年）、『現代写真家の仕事術 表現の◎』（彩流社・2011年）を著しました。後者は1994年から2001年まで『ペンタックスファミリー』に連載したものを基に、60名の写真家について論じています。



『昭和写真劇場』